



2014年3月よりアメリカ合衆国、メリーランド州ベセスダにあるアメリカ国立衛生研究所 (NIH) の National Cancer Institute (NCI) に留学させて頂いています。

ベセスダはワシントンD.C.より車で15分程北西に位置しています。ワシントンD.C.郊外でも有数の高級住宅地として知られていて、NIH以外にも米国消費者製品安全委員会、アメリカ国家地球空間情報国、海軍病院 (大統領が受診する病院) といった連邦政府の機関が立地しています。治安はいいのですが、家賃もかなり高額です。NIHはアメリカにおける医学研究の拠点であり、27の独立した研究所とセンターからなり、予算総額は年間200億ドル以上で、18,000人以上の職員が働いている巨大組織です。様々な病気・障害の原因・診断法・治療法・予防法を研究することが目的とされています。NIHからのノーベル賞受賞者は100人を超えるという世界トップレベルの研究施設です。最近、日本人研究者は減っていますが、現在も250人以上の日本人が働いています。

私が所属する研究室は、Molecular Imaging Program という branch でポスは小林久隆先生という日本人になります。研究室は小規模でポスと私以外に3人いるだけです (全員日本人です。ミーティングなどはグループ全体の30人程度で行われるので、英語でのやりとりが必要ですが)。小林先生は分子標的薬を用いて癌を光らせ、さらに癌特異的近赤外線治療 (Photoimmunotherapy ; PIT) を開発されました。この PIT 治療の論文が2011年に Nature Medicine に発表され、2015年からは臨床試験がスタートする予定です。私自身は日本では臨床が中心であったこともあり、研究を開始して10カ月になりますが、聞くこと、

すること、扱う機器のほとんどが知らないことだらけで、苦労の連続です。日本人研究室なので、日本語で相談できることはメリットですが、英語が全く上達しないこと、朝早くから夜遅くまで研究が続く点は日本に居ると一緒です。現在行っている研究はいろいろな癌細胞を用いて、*in vitro*、*in vivo* において近赤外線治療を行い、治療効果やメカニズムを解析しています。マウスとたわむれる毎日が続いています。研究室の先輩方から教わりながら、勉強しながら、試行錯誤の毎日で、研修医に戻った気分です。当然研究室の新人でもあるので、雑用や片づけも日課です。

日常生活は、やっと安定してきました。当初は英語の壁と日本と異なる環境・習慣の壁のため、生活のセットアップはかなり苦戦しました。でもこの苦労やトラブルは海外に住んだことのない日本育ちの日本人にとっては当たり前でもあります。こういった苦労やトラブル全てが留学の醍醐味であり、いい経験だと思えます。実際、生活が安定してみると、すでに当初の苦労は笑い話でしかありません (現在も小さなトラブルは繰り返されますが)。3人のうち2人の子供達 (小1と年長) は10カ月経った今、楽しそうに毎日学校に行っていますし、自然と英語が口から出るようになってきました。子供の順応力は本当にすごいです。日本にいるときよりは家族と過ごす時間がすごく増え、家族の支えのありがたさも感じています。休日には、行ったことのないところ、行ってみたいところに出かけるという旅行中のような楽しさもあります。日本では体験できない貴重な経験をさせてもらっています。

留学の機会をあたえて下さり、支援して下さいている田中榮司教授をはじめ、医局の先生方および関連病院の先生方に大変感謝しております。私は何事も経験が一番だと思っています。「百聞は一見にしかず」ということわざがありますが、やはり自分で見て経験することが一番重要です。私も医師として、臨床のみではなく、臨床を支えている研究をしてみる、違う国や環境で研究をしてみる、そういった経験が自分にプラスになると思っています。当然失敗や挫折もありますが、その失敗はマイナスではなく、失敗するという経験がプラスされ、必ず次の行動につながるはずです。この留学中に失敗も含めて多くの経験をして、帰国後はその経験を生かして頑張りたいと思います。

(2014月12月)

(信州大学医学部内科学第二教室所属)